

恋人はスナイパー EPI 3

登場人物

李美麗（リー・メイリー） - 香港警察の女刑事

趙偉軍（チャオ・ウェイジュン） - 香港警察の刑事

楊元（ヤン・ユアン） - 料理屋の息子、情報屋。凱歌の昔からの知り合い。

- 海道交易ビル前

ビルを見上げる船木、きなこ、周りに刑事数名

刑事「(船木に)行きますか？」

船木、頷き、手で合図する。入り口から踏み込む一同

- 海道交易内

室内に踏み込む一同、証拠隠滅のため室内を整理している社員達

船木「捜査令状だ。」

社員「警察だ！」

奥から数名の男達が飛び出してくる。

きなこ「来ましたね。」

船木「円道寺君、よろしく」

きなこ、乱闘シーン、あっさり全員倒す。

きなこ「なんか、手ごたえないっすね。」

捜査に入る一同、

刑事「殆んど持ち出された後ですね。」

きなこ「おかしいですね、今日の捜査の件がもれてたんでしょうか？」

パソコンを調べていた刑事が船木を呼ぶ。

刑事「課長！ これ見て下さい。」

パソコンの周りに集まる一同

船木「これは...」

刑事「1 2 1 1との通信記録ですね。」

刑事「慌てていたの、消し忘れたのでしょう。」

きなこ「ここは、1 2 1 1の日本支部って事ですか？」

刑事「日本での活動を再開したんですね。」

- 某国ビルの会議室

スコープから見える室内。円卓の周りに座り談笑する男達、一人にライフルの照準が合う。

ライフルの発射音、机の上の花瓶が碎け散る、騒然とする室内、ターゲットは無事。

- ビルの屋上

舌打ちして立ち上がるライフルを持ったスナイパー

銃を解体し、鞆を持って歩き出す。

屋上入り口から出てきた男が拳銃を撃つ。

倒れるスナイパー

- 香港1 2 1 1の本部

後ろ向きのソファーに座り、電話で話をしているコー・村木。机の前に立つ部下数名

コー「失敗したのか、殺られた？ またか...わかった。」

ソファーが回転しこちらを向くコー、近くに立つ部下に

コー「例の狙撃は失敗した。呉雄が、殺られた。王凱歌を連れ戻せ。」

- 香港警察取調室

机を挟んで、椅子に座る凱歌と取調べの刑事2人

刑事1「次は、香港マフィア 楚少奇の暗殺事件か。(時計を見る)

じゃ、今日はここまでで。」

俯いている凱歌、書類を整理する、刑事1、迎えの警官が、入ってくる。

李「ねえ、初めて、人を撃ったのはいつ？」

凱歌「？」

李刑事「どんな気分だった？」

凱歌答えず、チラッと李を見る。

李「(凱歌の手を掴みながら)随分、殊勝なのね、組織の命令だったから、仕方がなかったとでも思っているの。でも、この手は血塗れなのよ。どうしようもなく...」

凱歌「わかってます。」

悲しげに李を見上げる。李、凱歌の頬を殴打する。床に落ちる凱歌、警官が抱き起こす。

李「そういう態度が、腹立たしいのよ」

刑事1に抑えられる李刑事

- 香港警察国際課

デスクの前に立つ部長と李刑事、

部長「何を、いらいらしている？」

李「すいません。」

部長「取り敢えず、お前は担当を外れる、趙と一緒に、1211の武器不正取引の件の操作だ。
日本から依頼がきている。」

デスクの向こうで趙が李に頷く

李「えっ、はいわかりました。」

部長「それに、王凱歌の件は、どうせ終わりだ。」

李「？」

- 独房の中

ベッドに腰掛け俯いている凱歌

独房のドアが開く。鍵を持った看守。前に立つ刑事

刑事「釈放だ。」

凱歌、驚いて顔を上げる

刑事「出る。」

- 香港、警察署前

刑事に連れられ出てくる凱歌、眩しそうに空を見上げる。

- 香港繁華街

歩く凱歌、道を曲がった凱歌の前に1211の男が二人現れる。

男1「王凱歌、ボスがお待ちかねだ。」

凱歌「1211か？...もう、お出迎えか。釈放はお前達の仕業か？」

男1「ボスはお前を必要としている。」

凱歌、後ろを見る。数人の男が現れる。

凱歌、前の二人の男を振りきり逃げる。

街の中を追っ手を振り払いながら逃走する凱歌（格闘シーン）

- 繁華街

走る凱歌、映画館に逃げ込む

- 映画館

ドアをあけ館内に入る凱歌

スクリーンに男女のデートシーンの映像

きなこの事を思い出し(回想、花屋敷デート)、入り口の扉の前でスクリーンを見つめる凱歌

映像がキスシーンになった時、スクリーンが爆発する

ドアごと吹き飛ばす凱歌、爆発で吹き飛ばされた館内、負傷する人々

道路に倒れる凱歌、辺りも騒然となる。

二人組みの男が凱歌に近づく。

男A「間違いない、王凱歌だ。」

男B「こんなところにいるとは、」

男Aが男Bに促すと、凱歌を抱き上げて連れて行こうとする。

李が背後より、男の頭を蹴り上げる。乱闘シーン、凱歌が道路に落ちて、転がる。駐車中の車のドアが開き中から出た腕が凱歌を引っ張り上げ、李が凱歌を車に押し込む。

追いかけようとする男二人、そこにパトカー、救急車などが続々到着し、行く手を阻まれる。

凱歌を乗せた車は走り去る。

- テロ組織RDアジト

デスクに座るリーダー、前に立つ男A、男B

リーダー「爆弾テロは成功したが、王凱歌を逃がしたのは惜しかったな。奴がいなくなれば、
1211は、打撃を受ける。しかし、偶然にしてもあんなところ王がいたとは...」

男「そうですね。奴が今日、釈放されてたとは...」

リーダー「まあ、どっちにしろ1211は叩き潰す。」

- 車中

運転する元、助手席に李、後部座席に寝かされている凱歌

救急車とすれ違う。救急車を見る李

- 回想シーン

血だらけで救急車に運び込まれる少年、すがりつく李

李「秀峰！」

後部座席の凱歌の顔を振り返って見る李。

- 警視庁国際2課

デスク周りに船木と刑事達

刑事1「王凱歌が釈放されたって本当ですか？」

船木「香港警察からそういう情報がはいった。」

刑事2「釈放？如何いうことですか？」

刑事3「彼の殺人件数は、両手でも足りないと思いますが。」

きなこ「...」

船木「わからない。とにかく、香港に身柄を引き渡した以上、もう、我々には手を出せないわけだし...

刑事2「大体、身柄引渡し自体がおかしいじゃないですか、事件は日本で起きたんですよ。

しかも2件の狙撃事件が...

船木「香港警察への身柄引渡しも、上が決めた事だ」

きなこ「なんか、歯切れの悪い言い方しますね」

刑事3「なんか、裏がありそうな...

船木「とにかく、王凱歌の釈放は事件ではない」

きなこ「...」

- 警視庁会議室

会議後、解散する刑事達

船木「じゃ、この件の連絡頼む」

刑事「わかりました。」

刑事「私は、こっちを調べてみます。」

船木「お願いします。」

きなこ、座ったまま物思いに耽っている。

船木「円道寺君！」

きなこ「あ、はい課長、何でしょう」

慌てて、立ち上がるきなこ

船木「海道興行の武器密輸の件で、君に捜査協力要請が来ている。香港に飛んできてくれ」

きなこ「香港ですか？わかりました。でも、どうして、私なんでしょう」

船木「わからないが...上からの御指名だ。」

きなこ「香港...」

- 香港、ホテルの一室

ベッドに寝ている凱歌、横に立つ李、凱歌を見下ろしている。

凱歌、気が付き、がばっ、と起きる。

凱歌「誰だ！...君は...(李刑事だと気付く)」

凱歌、自分の服を、椅子の上に見つけ、毛布をめくり、上着を着ていない事に気付く。

凱歌「何をした！」

李「何もしてないわ、ケガをしてないか調べただけよ、王凱歌、

大丈夫、吹き飛ばされて、脳震盪起こしてただけよ。後は軽い打撲、奇跡的にね。」

李、テレビのスイッチを入れる。映画館爆破テロの様子が映し出されている。

李「悲惨だわ、罪もない人間が...(意味ありげに凱歌を見る) あなたの後をつけていたのよ」

凱歌「俺が組織に戻ったのか...俺を釈放したのは警察だぞ。そして、すぐに1211のお出迎えだ。いったい、どう言う事なんだ？」

李「さあ、私にもわからないわ。とにかく、あなたの意思がどうであれ、王凱歌を組織がほってば、おかないでしょうね。1211は、今、絶対に、スナイパーの数が足りない。特に信用できるスナイパーなんていないのよ。」

凱歌「？」

李「1211と敵対するテロ組織との抗争で、スナイパーが殆んどやられたのよ」

凱歌「俺は、組織に戻る気はない」

李「それは、困るわ。」

凱歌「?!」

李「戻ってもらわないと」

李、凱歌を見つめる。

チャイムが鳴る。ドアに向かう李

ボーイの声「ルームサービスです。」

凱歌、起き上がり、服を取る。

窓をあける。服を着ながら窓の下を見る(10階くらい) 窓の外へ隣りの窓に飛び移る。

部屋に戻った李、凱歌がいないので、慌てて窓の下を見る。道路を駆け去る凱歌を見下ろす。

- 骨董屋店内(夜)

品物を見ている八雲、後ろに立つきなこに気付く

八雲「ああ、あんたか」

きなこ「聞きたい事があるの。」

八雲「1211の事なら、何も知らない...」

きなこ「王凱歌...彼の香港での立ち回り先を知りたいの」

八雲「王凱歌? どうして、そんな事が知りたいんだ? 奴は警察に...」

きなこ「香港に移送されて、そこで、釈放になったのよ。情報はいつてないの?」

八雲「呼び戻されたのか...」

きなこ「如何いうこと?」

八雲に迫るきなこ、しらばくれる八雲、きなこ、そばにある人形の首に手刀を向ける

きなこ「可愛い顔してるな...」

八雲「おい、止める、それも高いんだから...」

きなこ「だから?」

八雲 「だからって...もう...組織が王凱歌を警察に逮捕させたのは、要するに、その方が確実に身柄が拘束できるからさ。奴さん、組織に戻る気がないし、逃げ回られるより、逮捕されてる方が居場所が確定だろう？」

きなこ 「そして、組織が彼を必要になったから呼び戻すってこと？...そんなこと出来る筈は...」

八雲 「それが出来るのさ...それが、１２１１だ、」

きなこ 「...」

八雲 「ところで、あんた、凱歌の女か？」

きなこ 「ちっ、違うわよ！」

八雲 「だって、この間、手を繋いでたじゃないか」

きなこ 「繋いでないわよ...なッ、なに言ってるの？」

八雲 「いや、珍しいなと思ったから、１２１１はスナイパーが女と係わるのを禁じている...」

きなこ 「何それ？禁じるって、恋愛禁止って事...へー、宝塚みたい...」

八雲 「？」

きなこ 「何でもない...こっちの話」

テーブルの上のメモ帳に住所を書きながら

八雲 「とはいっても、みんな、適当にやってるんだがなあ...奴さんは忠実に守ってたからな...」

八雲、きなこにメモを渡す。

八雲 「俺が知ってるのは、こちら辺だ。」

きなこ 「(受け取りながら)ありがとう。」

- 円道寺家居間(夜)

食卓の周りにつく、円道寺家、美智料理をテーブルに載せている。

美智 「お父さん、もう、きなこったら、香港に出張なんですってよ。」

雁太郎 「香港か、香港はいいとこだよな、いいなあ、きなこ、ただで行けて、」

はな 「いいな、お姉ちゃん。私も行きたい。お土産宜しくね」

きなこ 「やだな、みんな、何言ってるの、仕事よ仕事、遊びじゃないんだから」

美智 「もう、いつになったら、あんた刑事辞めるの？ねえ、香港なんて危ないんでしょね。」

きなこ 「大丈夫よ、別に凶悪犯追っかけてる訳じゃないんだから、母さんは、心配しすぎ。」

雁太郎 「いつまで行ってんだ？」

きなこ 「１０日ぐらいかな。」

雁太郎 「じゃ、その間、飲み仲間が、いなくなっちゃうな。」

美智 「いつも勝手に飲んでるじゃないの。」

はな 「香港で...あっ今、ホイさん香港でしょ？逢えないのかな？」

黙り込む一同、

はな 「あっ、ごめん。」

きなこ 「...別の件で行くんだから、ホイさんとは。ホイさんね、...釈放されたいの」

一同 「えっ」

美智 「いつ、じゃあ、日本に帰ってくるのかしら？」

きなこ 「さあ、詳しい事はまだ...」

雁太郎 「でも、なんで釈放なんだ？」

きなこ 「わからない...」

はな 「でも、よかったじゃない、ホイさんのお母さん喜ぶよ、きつと」

美智 「そうね、早速、知らせなくちゃね、ね、雁太郎」

雁太郎 「(曖昧に)ああ」

きなこを見る雁太郎、目をそらすきなこ

- 香港路上

歩いている凱歌、影から現れる１２１１の男達３人

凱歌、追っ手をかわして、逃げようとする。行く手を阻むテロ組織ＲＤの男ＡとＢ、銃を構えている。

男二人発砲、１２１１の男に命中、倒れる。

凱歌、驚いて、倒れた男を見る。身体から流れ出す血が地面に広がる。

１２１１の男１「奴等だ。逃げろ」

１２１１の男２「ダメだ、凱歌を、守れ」

１２１１の男達、闘おうとするが、次々撃たれる。

凱歌、狙われ、よけるが、左手を弾がかすめる。地面に滴り落ちる血。

凱歌、銃を蹴り上げ、テロ組織の男達を飛び越えて逃走する。

—香港中華料理店

円卓に座る凱歌と元

元 「全く、今までどこにいたんだ？ ここに来たらやばいだろ、組織の連中が探してるし、ほかの奴等もお前を狙ってるって噂だ。」

凱歌 「ほかの奴等？」

元 「テロ集団ＲＤの連中だ。今、１２１１とやばい事になってるらしい。この前の映画館の爆破も連中の仕業だ。」

凱歌 「ＲＤか...。１２１１はここにも来るのか？」

元 「当たり前だろ、お前の行きそうな所なんか組織の連中は全部わかってるさ。組織の連中が現れるとハイエナ見たいにＲＤもやってくる。」

ついたての後ろから李が現れる。

李 「そうね。何処に行っても逃げ場はないわ。」
凱歌「(睨みつけて)元、この女を知ってるのか...」
元、気まずそうに李の顔を見る
李 「元は私の情報屋よ、この間も、あなたをホテルに運ぶの手伝ってもらったわ。」
驚いて元を見る凱歌。
凱歌「元、お前、いつから...」
元 「俺はフリーの情報屋さ、金さえもらえば誰とだって組むさ。
だいたい、お前、この街離れて、2年近くも帰ってこないからさ...」
李、凱歌の横に立つ。凱歌の左手を掴む李、手に巻いた白い布に血が滲んでいる。
李 「この傷は、どうしたの? 1 2 1 1 は、あなたを銃で撃ったりしないわ。
でも、奴等は違う。元、傷の手当てをしてあげて。」

- 香港 1 2 1 1 の本部

熱帯魚に餌をやっているコー
部下が入ってくる。
部下「王凱歌を追跡中、奴等が現れました。」
コー「凱歌は無事か」
部下「逃げたようです。」
コー「早く、奴を連れ戻せ」

—香港中華料理店

円卓に座る凱歌、と李、凱歌の前に立つ元。円卓の上に救急箱。
元、凱歌の手に巻いた包帯の端を止める。
元「できた。(救急箱を片付けながら)かすり傷ですんでよかったけど、凱歌、お前ホントに気をつけろよ。」
元、救急箱を持って去る。
李 「いなくなったから、探したわ。」
凱歌「どこに行こうと君の指図は受けない...」
李 「そうはいかないわ。そこらへんを暢気にふらふら歩かれたら困るわね、あなたを狙っている連中が
山ほどいるって、よくわかったでしょ。...あなたにはやって欲しいことがあるの。」
テーブルの上の凱歌の手を握る李

- 香港空港

歩いてくるきなこ

- 香港警察廊下

(きなここと部長の会話は英語)
部長の後を歩くきなこ、慌しい廊下
部長 「すまないね、せっかく、来てもらったのに、何しろ昨日の爆弾テロで、忙しくてね。」
きなこ「あ、ニュースを見ました。犯行グループはもうわかっているんですか?」
部長 「ああ、最近、活発に活動しているテロ組織 R D だ。」
きなこ「爆弾テロを繰り返しているテロ組織ですね。北京や上海で事件がありましたね。」
部長 「遂に、香港の繁華街にまで進出してきた。最悪だ!」

- 香港警察国際課

関係部署に紹介されるきなこ
部長 「こちらが、日本から応援に来てもらった円道寺さんだ。」
きなこ「よろしく」
趙 「担当の趙です。」
李 「同じく、李です。」
部長 「彼等は、日本語が、話せる」
二人と握手するきなこ
呂 「日本から来たんですね。僕は呂です。日本に行った事ありますよ。
ディズニーランドがよかったな。円道寺さん、今夜夕飯一緒に行きませんか、
美味しいとしてますから」
李 「はいはい、呂は今夜、夜勤でしょ」
部長 「呂、お前には応援要請が来てるぞ、聞き込み行って来い!」
呂 「人使い荒いなー」
呂、出て行く。
趙 「全く、可愛い娘には、みさかいがないから...」
苦笑するきなこ

- 香港警察会議室

スライドを見ている李、趙、きなこ
きなこ「では、やはり海道交易の武器密輸も 1 2 1 1 の仕業だと」
李 「そうです。日本のアジトは引き払いましたが、海道交易を日本の拠点にしたのでしょう。
彼等は世界中に拠点をもっています。」
きなこ「ところで、王凱歌は、何故、釈放されたのですか」
趙 「それは...証拠がないからです。公判が維持できないとの判断でしょう」

きなこ 「どうしてですか？日本でもそうでした。でも、彼は罪を認めています。自白は…」
趙 「確かに彼は協力的でした。」
きなこ 「それならばどうして…納得できない」
李 「我々も納得なんてしてませんよ。あなたは、王凱歌と個人的に親しいとの話を聞いていますが」
きなこ 「彼が私の家に、留学生と偽って下宿していたのです。」
趙 「王凱歌のプロフィールは、殆んど知られていなかったのですよ。日本での事件までは、顔さえわからなかった。王凱歌が、実際の狙撃事件に絡んでいるのか把握できていません。」
きなこ 「如何いことですか？」
趙 「実は、1211のスナイパーは活動する時は全て、王凱歌の名前を使うのです。どれが本物の王凱歌の狙撃で、どれが偽者なのか特定できません。」
きなこ 「どうしてそんな事をする必要があるんでしょうか？」
趙 「ネームバリュー - でしょう。狙撃の依頼者がいた場合は特に、王凱歌の名前を使った方が信頼度が高い。」
きなこ 「…」

- 香港繁華街

八雲からのメモを片手に歩くきなこ。何軒か尋ねるが知らないと言われる。
メモの文字と看板を見比べる。
後をつけられているような気配に振り向くきなこ、物影に隠れる人影
路地に走り込むきなこ、物陰から現れた人影がきなこに襲いかかる。
かわす、きなこ、二人で戦う、二人飛びのいて着地し、向き合って構えるきなここと凱歌。お互いに気付く。
きなこ 「ホイさん！」
凱歌 「きなこさん！どうしてここに…」
見詰め合う二人
物陰から二人を覗く李

—ホテル中庭

噴水前のベンチに並んで座る、きなここと凱歌
凱歌 「もう、逢えないと思ってた。」
きなこ 「面会に行った時、如何して会ってくれなかったの？」
凱歌 「それは(黙り込む)…きなこさん、まだ結婚してないの？ お父さんが言ってたけど」
きなこ 「ホイさん、父さんには会ってたのよね。」
凱歌 「お父さんは、いつも母さんの様子を教えてくださいました、後、差し入れもしてくれて」
きなこ 「あ、まっずい中華でしょ、ホイさんがいないなら、店なんてう畳んじやった方がいいのに、もう、客なんてきやしないんだから…」
凱歌 「…」
きなこ 「…結婚は取り敢えずやめたの。」

回想シーン

船木 「中止、延期じゃなくて中止…」
きなこ 「すいません。」
船木 「何故？君はやっぱり…」
きなこ 「私、ほっとけないんです、王凱歌の事を。どうしても、気になってしまっんです。」
船木 「彼の事を…その…好きなの？」
きなこ 「わかりません。でも、どうしても、彼の事が気になるんです。こんな気持ちで結婚したら、部長にもご迷惑でしょうし…」
船木 「二回目」
きなこ 「？」
船木 「振られるの二回目…大丈夫、慣れてるから…君に振られるの」
きなこ 「すいません…」

凱歌 「きなこさん？」
きなこ 「なんでもない…それより、これから如何するの？追われているんでしょ？」
凱歌 「逃げていてもしょうがないんだ。それはわかっている」
きなこ 「まさか、一人で乗り込む気じゃないでしょう？」
凱歌 「1211は、巨大な組織だ。僕一人ではどうにもならない。」

- 香港のショッピングモール

ショウウィンドウを覗いたり、歩き回るきなここと凱歌
きなこ 「香港詳しいの？」
凱歌 「仕事や訓練がない時はここで暮らしてた。(ブランドショップを覗いて)でもこんな所では買い物しない。」
きなこ 「(凱歌を上から下まで見て) だよな」

- 公園

鳥に餌をやりながらはしゃぐきなここと見守る凱歌の映像
きなこ 「香港では一人で暮らしてたの？」
凱歌 「いや、いつも組織の誰かと一緒だった。見張られてたのかな。」

きなこ「どうして？」
凱歌「信用されていなかった、仕事が嫌いだったから...」
きなこ「でも、腕がいいから、組織はあなたを手放したくなかったのね。」
凱歌「いろんな国へ行かされた。でも、日本で仕事はなかった。」
きなこ「あの時が初めてだったのね。」
凱歌「15年も待たされた。」

- 路上

歩いている凱歌ときなこ、店の前でちらちらと歩く二人を見ている元、二人が近付くと店のショウウィンドウを慌てて覗く。元の肩を叩く凱歌
(以下中国語)
凱歌「元！」
元「(驚いたように)凱歌！凱歌じゃないか」
凱歌「白々しいな...あの女に頼まれて俺を張ってたのか？」
元の肩をぎゅっと掴む。
元「違うよ、偶然見かけたんだ。(凱歌、更に肩を強く握る)うそじゃない！(凱歌、手を離す)もう、馬鹿力だな！いてっ。(肩を撫でながら)だいたい、お前、こんな所をふらふらしてる場合じゃないだろう。俺はてっきり、李美麗と一緒になのかと思ったのさ、ちょっとその、後ろ姿が似てた。(きなこを顎で挿す)...この前もずっと李と話し込んでたしな...そしたら、違う女だった。日本人だな。言葉が日本語だ。びっくりした...王凱歌が女と一緒にいるなんて、昔はなかったからな...しかも、楽しそうで...」
凱歌「余計なお世話だ。(元の頭を小突く)お前、あの女と組んでるんじゃないのか？」
元「雑用は頼まれるが、肝心な事は俺には言わないのさ。お前とそっくりだ。
なあ、凱歌、李は、お前に何を頼んでたんだ？」
凱歌、元に目配せする。元、きなこがじっと見ているのに気付き慌てて話を変える。
元「そうだ、凱歌、親父が顔出せて行ってたぞ。この前会えなかったから、どうせまた店を手伝わせる気だ。お前は腕がいいからな、息子の俺と違って」
凱歌「そのうちな、おやっさんに宜しく言っといて」
元「ああ、わかった。じゃあな、(耳元で)気をつけろよ」
凱歌、手でわかったと合図する。
元、手を振って去る
きなこ「誰？」
凱歌「楊元、昔の仲間だ」
きなこ「1211？」
凱歌「いや、昔は街のチンピラだった。今は情報屋やって小遣い稼ぎをしている。いい加減だけど根はいい奴だ。あいつの親父が料理屋をやってて、そこで昔世話になってた。料理もそこでおぼえたんだ。」
きなこ「へー、だから、ホイさんの料理は本格的なんだ。父さんもそこで修行させなきゃね、少しは美味しいものが作れるかも...」

- 夜景の見える展望台(夜)

夜景を見るきなこ、後ろに立つ凱歌
きなこ「きれいね。」
凱歌「(きなこの顔を見ている)ホントに」
きなこ「(振り向いて)ホイさんて、女の人とつきあったことないの？」
凱歌「(急に振り向いたきなこに慌てて)えっ」
きなこ「八雲が言ってた、「女といるなんて珍しい」って、私に「王凱歌の女か」って聞いたの、おかしいでしょ？」
凱歌「元もそんなこと言ってたな...」
きなこ「そうなんだ、」
笑いながら、凱歌を見る。目が合う二人、気まずそうに互いに目をそらす。
凱歌の視線の先、銃口が目に入る。
慌ててきなこを抱え飛びのく凱歌、エレベーターの前に転がる2人、ちょうどドアが開く。
発砲音、ドアに弾があたりドアに穴が空く。降りようとしていた客が悲鳴をあげエレベーター内に戻る。
凱歌、きなこを守るためエレベーター内に押し込む。きなこ慌てて凱歌から離れない様に外に出ようとするが人波に押され奥へ、ドアが閉まる。
凱歌、弾丸をよけながら飛びのいて、床を転がり、非常口へ。ドアから非常階段へ出る。

- 展望台非常階段

階段を駆け下りていく凱歌。撃ちながら後を追う敵、目の前の手すりに弾があたり、振り返る凱歌。背後の階段の上に銃を構える敵、階段にて乱闘、踊り場の手すりに追い詰められる凱歌。
李の声「凱歌！」
下を見る凱歌、路上にバイクに乗った李が見える。
凱歌、階段を飛び降りる。バイクの後ろに飛び乗る凱歌。走り出すバイク。ヘルメットを被る凱歌。
凱歌「まだ、彼女が中にいるんだ！」
李「(集まってくるパトカーを見て)大丈夫よ彼女だって刑事だわ。(バックミラー越しに凱歌を見て微笑む)あなたは自分の心配だけをしてなさい、王凱歌」
路地の階段を登って走り去るバイク。